

Title	子宮ガン
Author(s)	早川, 謙一
Citation	癌と人. 1976, 4, p. 16-18
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/24257">https://hdl.handle.net/11094/24257</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## 4. 子宮ガン

早川 謙 一\*

### 4-1. 子宮ガンからあなたを守るために

是非知っておきたい事柄を判りやすく解説してみました。

日本人女性の三大死因は、1) 脳血管障害 2) 悪性新生物 3) 心疾患で、2) の中で子宮ガンは女性の悪性腫瘍の第2位を占める女性特有の疾患です。現在、日本婦人では3000人に1人の割で子宮ガンが発見され、子宮ガン患者の4人に1人が、その為に命を失っています。

### 4-2. 子宮ガンとはどんな病気か

子宮は女性性生殖器の中心で、妊娠していないときは、鶏の卵位の大きさです。小骨盤の中央に位置し、前は膀胱と、後は直腸と接しており、その下方は膣につづいています。(図1)

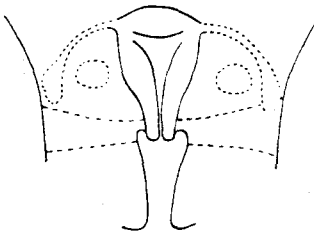


図1. 子宮附属器及び子宮傍結合織の状態

子宮ガンは発生する場所によって、2種類にわけることができます。すなわち、子宮の内側で最も奥のふくらんだ部分に出来るガンを子宮本ガン(または内膜ガン)といい、子宮の出口に当る子宮頸部に出来るガンを子宮頸ガンといいます。日本人の子宮ガンは圧倒的に子宮頸ガンが多く、全子宮ガンの95%を占めますが、子宮体ガンも最近はやや増加する傾向にあります。

### 4-3. 子宮頸ガンについて

まず、日本人に多い子宮頸ガンについて知っていただきたいことをまとめてみました。

### 1. 自分で気がつく初期の症状

子宮頸ガンの初期症状には、次の3つのものがあげられます。

- 1) 性行為のあとの出血(接触性出血)
- 2) 月経以外の出血(不正性器出血)
- 3) 茶褐色、ピンク色や血液の混ったおりもの(帯下)

子宮ガンのとき、これらの症状が出ますが、これらの症状が出たからといって子宮ガンとはいえません。膣部ビラン、トリコモナスやカンジタによる膣炎、老人性膣炎等ありふれた婦人科の病気によっても、同じような症状が出ますので、おかしいなと思ったらすぐガン検診を受けることが第一です。

### 2. 症状に気づいて医者に行くのと定期検診でガンを発見されるのとの差

日本人に多い子宮頸ガンは病気の進み具合いで、0期から4期までの5つの段階に分けられています。0期とは、自覚症状は皆無で検診によってのみ発見される顕微鏡検査ではじめてみつかると一番初期のガンです。I期は、ガンは子宮の中にとどまっているが目でもみてもわかるほどになっている状態であり、II期はそれ以上にガンが子宮の外に少しはみ出した状態です。この時期からは自覚症状が出てきます。III期になりますと、ガンが骨盤の骨まで侵していったものです。この時期になりますと、治療がだんだん困難になります。IV期とは、子宮ガンの最も進んだ状態のもので、ガンは膀胱や直腸までひろがり、体の遠くの場所へ転移が認められることもあります。こうなりますと益々治療は困難になってきます。子宮ガンの進み方は簡単には以上のようなのですが、一般に、無症状で定期的にガン検診を受けていると、子宮ガンはほとんど早期に、すなわち0期で発見されます。たまにI期で発見されることもあります。II期、ある

\* 大阪大学講師(微生物病研究所附属病院産婦人科)

いはそれ以上にすすんだ状態で発見されることは稀れです。ところが自覚症状がはっきり出たから受診すると、たいていはⅠ期からⅡ期で発見される場合が多く、病院に行くのを恥ずかしがったり、怖がったりして長い間放置していた場合は、更に進んだ状態で発見される場合もあります。

↓

### 3. ガンの発見される時期と治療法の関係

0期、Ⅰ期、Ⅱ期は主として手術療法が行われます。0期では、子宮だけをとれば充分ですが、Ⅰ期あるいはⅡ期では、更に広汎な手術が必要で、手術に伴う危険性や、手術後の合併症などの頻度が高くなります。

Ⅲ期、Ⅳ期は主として、放射線療法が行われます。しかし、現在では、この治療にも限界があります。

↓

### 4. ガンの進行期と治癒率の関係

0期ではほぼ100%がなおり、Ⅰ期では約85%、Ⅱ期では67%、Ⅲ期では37%、Ⅳ期では15%と、治療の困難さに逆って、ますます5年生存率は落ちていきます。このようなことからみても、ガンに苦しんだり、死なないためには、自覚症状が出る以前での早期発見、つまり自発的な定期検診を受けるようにすることがいかに大切かが、おわかりいただけると思います。子宮ガンは現在、定期検診によって早期発見が可能であり、治療も早期では100%なおるようになりました。現在は、あなたの意志で、子宮ガンにうち勝てる時代がきたともいえます。

### 5. 検診はどの程度の間隔で受けるべきか

ある地域における昭和37年から昭和47年にわたる延べ約16万人の検診の成績によりますと、2年間に1回子宮ガン検診を受けていますと手遅れにならずにすむという結果がでています。念には念を入れますと、やはり1年に1回が適当なところでしょう。もちろん、医師の指示により、その間隔は更に短くなる場合もあります。

### 6. 何才から検診を受けるべきか

子宮ガンにかかる人が増え出すのは、やはり30才を過ぎてからです。それから一生続けるのが望ましいと思われれます。決して、1回や

2回で安心はできません。また非常に稀れな場合ですが、20才台にも子宮頸ガンは発生することがあります。

私共が協力している大阪府保健所婦人科クリニックで発見された子宮ガン患者の年齢分布を御覧下さい。

大阪府保健所婦人科クリニックで発見された  
子宮ガン患者の年齢分布  
(昭和44~46年度)(%)

病名 年齢	受診者数	子宮ガン	
		頸ガン	体ガン
~19	31	0	0
20~29	3,920	5(0.1)	0
30~39	20,331	75(0.4)	0
40~49	16,019	109(0.7)	3(0.02)
50~59	6,160	114(1.9)	1(0.02)
60~69	1,340	49(3.7)	1(0.08)
70~	117	21(17.9)	0
計	48,518	368(0.8)	5(0.01)

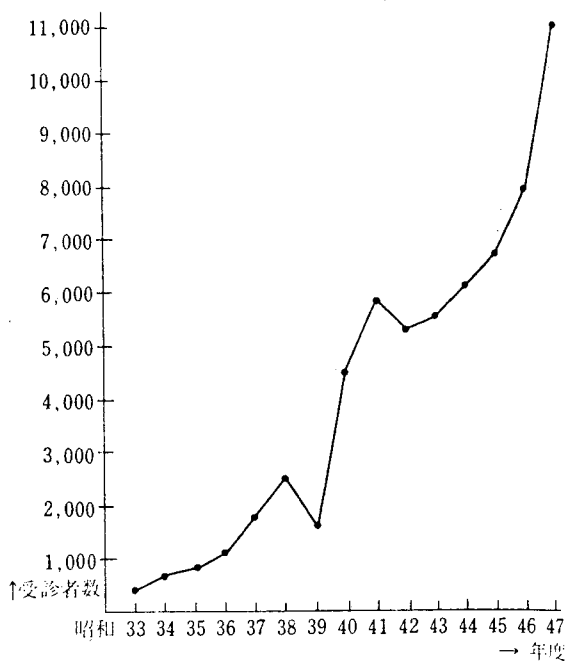
### 7. 定期検診とは、どのような検査なのか

子宮頸ガンの定期検診で行われるのは細胞診と呼ばれるもので、細い綿棒で膣の奥に見えている子宮口（ここは最も発生しやすい場所です）を軽くこすり、この部分の細胞を採取し、それをガラス板に塗布し、特殊な染色を施し、専門家が顕微鏡で検査しますが、患者さんにとっては、痛くも痒くもありません。こんなに患者さんにとって簡単な検査で、皆さんが子宮ガンから救われるのですから、ありがたいものです。参考までに、大阪府保健所婦人科クリニックにおける年度別受診者の推移をあげておきます。しだいに多くの人が検診を受けていることがわかります。

### 8. どこへ行けば検診を受けられるか

大阪府下25ヶ所の保健所及び支所、大学病院、市民病院、婦人科診療所等で行っています。保健所の検診の日時などは、保健所、市当局、地区婦人会などの広報活動によって知らされています。また、検診当日に月経がある場合は検査成績が不正確になるので、別の日に受診される

大阪府保健所婦人科クリニックにおける  
年度別受診者数の推移  
(昭和33年～47年度)



ようお勧めします。

この様に細胞診を行い、異常を認めた場合更に、必要に応じて、コルポスコープと云う特殊な実体顕微鏡を用いて子宮口の部分を拡大して観察したり、変化のある部分の組織を切りとって、詳しい顕微鏡の検査を行い、最終的なガンの診断を行います。月経中や、炎症などがある場合は、検査の結果が不正確になる場合がありますから、日を改めて受診されることも大切です。

#### 9. その他、子宮頸ガンについて知っておいて頂きたいこと

一般に子宮頸ガンは子宮口の粘膜上に最も発生しやすいので、容易に、早期に発見される可能性をもっています。あなたがたの中に、子宮口のピランを指摘されている人がいると思いますが、このピランは大部分が良性のピランで、子宮の内側の細胞が子宮口の外側にまではみ出してきた状態で、細胞診を行っても悪性所見はなく、ガンとの関係はみとめられませんので検査を受けている限り心配はいりません。

子宮頸ガンになった人についてよく調べてみると、性生活を開始した年令が若い人（例えば10代で結婚した人）、妊娠や分娩回数の多い人、不潔な性生活を行っていた人（性生活にルーズであったり、夫が包茎であるなど、お互いに生殖器の清潔に心掛けない人）などに多く発生する傾向を示していますので、この様人は特に気をつける必要があります。

#### 4-4. 子宮体ガンについて

いままでは、日本婦人の子宮ガンの大部分を占める子宮頸ガンについてお話しましたが、子宮の体部（奥の方）に出来る体ガンについて少しふれてみたいと思います。体ガンは、もともと欧米白人女性に多く発生していましたが、最近日本の経済的及び社会的な生活様式が欧米型になるのに伴い、その発生がふえつつあります。

子宮体部ガンになった人をよく調べてみると、頸ガンとは逆に、未婚あるいは妊娠回数の少ない人がなりやすく、高血圧や糖尿病、肥満などを伴っている場合が非常に多いのが特徴です。女性ホルモンの中で、卵胞ホルモンの長期連用も、このガンの発展と関係があるとされています。発症年令は、50才代、60才代が多く、一旦閉経したのに月経の様な出血がある場合は、是非検査を受けられることをすすめますが、頸ガンの様に直接目で見る事が出来ませんので、発見はやや困難ですが、治療を行った場合は、頸ガンより治癒率が高いのが救いです。

#### 4-5. おわりに

子宮ガンは、他の場所に出来たガンと比較して早期発見が容易であり、治癒率が高いのが特徴です。従って、年々この病気で死亡する人の数は減少しています。あなたがたの自発的な検査を受ける意志により、子宮ガンで死亡する人がなくなる日も遠くありません。